僕と幽霊と・・・

tanaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幽霊と・・・

【Ｎコード】

Ｎ８１０５Ｙ

【作者名】

ｔａｎａｋａ

【あらすじ】

霊感の強い主人公と幽霊の女性。二人とその周りのラブコメです。後々、ややハーレムぎみになります。

一話　幽霊に告白されて・・・

僕の家系は昔から霊感が強かったらしい。そしてその家系の人間である僕も同じように霊感が強かった。だから幽霊なんて昔から頻繁に目にしてきたわけで――

今更、幽霊を見ても驚きはしないし、恐怖に怯えることもない。

「えーと、適当にお経でも唱えれば成仏するかな」

「えぇっ！？　私の存在を感知してくれたのは嬉しいけど、いきなり成仏させようとするのはどうなの！？」

「お経が書いてある紙、何処にやったかな？」

「無視っ！？　ねぇ！　無視してるの！？　無視するなんて人としてどうなの！？」

耳元でわーわーと、叫ぶ幽霊。無視だなんて、とんでもない。僕は善意で目の前の幽霊を成仏させてあげようとしているのに。

「……何か僕に用でもあるんですか？」

面倒だけど……凄く面倒だけど、一応話しくらいは聞いてあげよう。

僕個人の意見としては、今すぐにでも成仏させたいんだけどね。あぁ、本当に面倒だよ。

「なんか、物凄く面倒な奴って思われてる気がする……」

「……気のせいですよ」

「ならいいけど」

「それで、あなたは何のためにこの家に来たんですか？」

もしかして、何の目的もなくこの家に来たとかじゃないだろうね。幽霊なんだから、

それなりの理由があってこの場所に来ているんでしょ？

「え？　もしかして美少女幽霊の私のことが気になっちゃう感じかな？」
「よし。お経を探そう」
この人は特に目的もなさそうだ。こういう手合いは、さっさと成仏させるに限る。
「そ、そんなこと言わないでぇ！　私が悪かったから成仏させようとしないで！」
部屋から出て行こうとする僕の足にしがみついてくる彼女。
そんな風に足にしがみつかれると邪魔なんですけど。
「ちゃんと話すから！　ちゃんと理由を話すから！」
「……分かりました。では、理由を話して下さい」
足を止め、彼女の言葉を待つ。
「あのね、私恋をしたいのです！」
「……そういうのは天国でやってください」
そもそも恋をしたいというのと、あなたがここに居るのは関係ないですよね？
死んだ人同士で、天国で楽しく恋でもしていればいいじゃないですか。
「違うの！　私はこっちの世界で恋をしたいの！」
「恋をしたいと言っても、あなたもうすでに死んでいるじゃないですか」
死んで幽霊になってしまった以上、この世界で恋をすることは出来ないだろう。
可能性があるとすれば、同じくまだこの世界に残っている幽霊とだけど……
「――だから私は、あなたに会いに来たの！」
「何でそこで僕が出てくるんですか？」
ある程度霊感が強いといっても、彼女に恋をさせるような能力は持っていない。
正直、頼る相手を間違えていると思う。僕に出来るのは、こうし

て会話をしてあげる
ことくらいなのだから。
「だって私は、あなたと恋をしたいのだから！」
ババーンと、まるで効果音でも付きそうな勢いで、とんでもない
ことを言う彼女。
僕と恋をしたい？　この幽霊は一体、なにを馬鹿なことを言って
いるのだろうか。
「お断りします」
「な、何で！？　そんなすぐに拒否しなくてもいいじゃない！　自
慢じゃないけど、私
なかなかに可愛いんだよ？」
「そういう問題じゃないでしょ……」
可愛いとか、可愛くないとかそういう問題ではなくて、僕は生き
ていてあなたは死ん
でいるんですよ。それで、どうやって恋をしろと言うのだろうか？
「ぶー、問題ないはずだよ！　だって、あなたはここら辺で一番霊
感が強いんだから」
「それはそうかもしれませんけど……」
「こうして私と会話も出来てるし、何より触れることだって出来る
んだよ！」
僕の手を取り、自身の身体に触れさせる。
「な、何をして――っ！？」
「ね……私の身体の温もりが分かるでしょ？　ここまで分かる人は、
なかなかいないん
だよ？　だからお願いだから私と――」
半分、涙目になりながら僕にお願いをしてくる彼女。一体、何が
彼女をここまでさせ
ているのだろうか？　僕には分からないし、知る必要もないだろう。
ただ一つ分かること。それは『恋』というのが彼女をこの世界に
留まらせている理由

なんだろうということだけだ。
「えっと、あなたは……」
「……渚だよ。倉科渚」
「じゃあ倉科さん。僕とあなたは今日が初対面なんですよ？　それなのに、いきなり僕
と恋がしたい。だなんて言われても困ります」
　確かに、初対面で一目惚れというのは存在はするけど、倉科さんの場合は明らかに違う。
　一目惚れとは違う理由で僕と恋をしたがっている。
「あなたにとっては初対面かもｓれないけど、私にとっては違うんだよ。ずっと前から
あなたの……輝くんのこと知っているんだよ」
　僕は知らなくて、倉科さんは知っている。それってもしかして軽いストーカーの類で
はないだろうか？
「ストーカーって言うのはちょっと失礼だわ。恋する乙女と言って欲しいわ」
「恋する乙女って……」
　恋をしていたら、何をやってもいいというのだろうか？　それに倉科さんが乙女って
――実際の年齢は知らないが、見た目で判断しても乙女って年齢じゃないだろう。
　恋する女性ってところだろ。
「今、すっごい私をバカにしなかった？」
「そんなことはないですよ」
　死んでいる相手とはいえ、僕が年上の女性を馬鹿にすると思いますか？
「……目が笑ってる。やっぱり私をバカにしてたでしょ！」
「気のせいですってば」
　そこまで表情に出るほどバカにしてた覚えはない、かな？

「そんな年上のお姉さんを敬うことの出来ない輝くんは、罰として私と付き合ってもらいます！」
「罰としてって……それでいいんですか？」
そんな理由で付き合うのもおかしいと思うけどね。
「罰でもなんでもいいの！　輝くんが私と付き合ってくれるならいいの！」
「ですから、いきなり付き合うというのは……」
「どうしてそこまで深く考えるのかな？　別にそんなに難しいことは言ってないんだけどな」
「難しいすぎるでしょ……」
初めて合った人？　といきなり付き合うのは難しいことでしょ。
「もう……ほんとに輝くんは我儘なんだから。そこまで言うのなら、まずはお友達から
初めましょ」
我儘なのは、あなたの方ですけどね。まぁ、でも友達からなら僕も構わないかな。
「分かりました。まずは友達から始めましょう」
幽霊が友達っていうのも悪くはないんじゃないかな。
「うん。まずはお友達からだね♪」
友達から、というのでどうやら納得をしてくれたようだ。まずは相手のことを知るために友達から始めるのが一番いいだろう。
「えへへ……よろしくね。輝くん！」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
差し出された手を握り握手をす――っ！？
「うわっ！？」
「ふ、ふ、ふ……引っか掛かったわね」
握手をした瞬間、倉科さんに引っ張られ彼女の方へと倒れ込んでしまう。つーか、僕

は倉科さんの何に引っか掛かったというのだろうか？　別に騙されるようなことをされてはいないはずなんだけどね。
――と、そんなことより、
「何をしてるんですか……」
倉科さんの行動に対して文句を言わないといけない。いきなり引っ張られると驚くし、危ないからね。だというのに――
「うんうん、やっぱり人に触れられるっていうのはいいもんだね♪」
まったく反省もせず、人に触れる喜びを感じている倉科さん。
はぁ……そこまで嬉しそうな顔をされてしまったら、文句を言いにくくなってしまうじゃないか。
「はぁ……仕方ない、か」
「ん？　どうしたの？」
「何でもないですよ……」
ええ、本当に何でもないですよ。あなたに文句を言いたかったとか、そんなことは欠片もないですよ？
「変な輝くん」
一番変なのは倉科さん、あなたですよ。

「ただいま帰りました」
「誰か帰ってきたみたいだね」
「この声は妹の沙羅ですよ」
僕の妹の沙羅。彼女も僕と同じように霊感が強い。だから倉科さんを認識することも会話をすることも出来るだろう。
倉科さんが友達を作りたいというだけなら、沙羅を紹介してあげてたんだけどね。

残念ながら、倉科さんの目的は違ったんだよね。
「お兄様。ただいま帰りまし――――」
あれ？　沙羅が僕を見た瞬間、石のように固まってしまった。
「さ、沙羅……？」
「……お、お兄様？　そ、その方は……？」
身体をプルプルと震わせながら、倉科さんを指さす。
沙羅。幽霊とはいえ、相手を指さすのはどうかと思うよ。
「は～い♪　輝くんの妹さんの沙羅ちゃんだね。私は倉科渚だよ♪」
「あ、どうもお兄様の妹の沙羅です……って、そうじゃなくて！
あ、ああ、ああ、あなたは
わたしのお兄様と何をしているのですか！？」
「沙羅。何を言っているんだ？　僕達は何もしていないぞ」
「お兄様！　わたし、嘘は嫌いです。ご自身の今の姿を見ても、お兄様は何もしていな
いと言い切れるのですか？」
「僕の今の姿……？」
いや、ごく普通の姿のはず……じゃあないね。忘れてたけど、倉科さんに引っ張られ
て彼女に覆いかぶさるように倒れていたんだっけか。
確かにこの姿は、何もしていないようには見えないわな。
「お兄様。丁寧な説明をお願いしてもよろしいですか？」
鬼のような形相で僕に説明を求めてくる沙羅。これは真面目に答えないと、僕が殺さ
れてしまいそうだ。
「あ、あのな沙羅……これには深い理由があってだな」
倉科さんのことを説明しなければいけないのは分かるが、どこまで話していいのか分
からない。僕と恋をしたいとか、そういった件は説明出来ないし、かと言ってあまり説
明を省略すると沙羅に怒られそうだし……

「輝くん。全てお姉さんの任せなさい」
「倉科さん……」
物凄く嫌な予感がする。この人は、言わなくてもいい余計なことを沙羅に言ってしまいそうだ。
「いえ、ここは僕が――」
「あのね沙羅ちゃん。私とお兄さんは恋人同士なのよ♪」
「「な――っ！？」」
やりやがった。僕が穏便に済ませようとしていたのに、勝手に爆弾発言をしたよ。
しかも微妙に捏造されてるし。
「お、おお、お兄様……？」
ま、拙い。沙羅が本気で怒っている。今更、倉科さんの嘘だと言っても信じてもらえないだろう。これはもしかしたら、骨の一本や二本は覚悟した方がいいかもしれない。
「まぁ、半分冗談で今はお友達の関係なんだけど……って聞いてないか」
「そうですね。ほんと、とんでもないことを言ってくれましたよ」
「でも、輝くんと恋人関係になりたいってのは、私の本心だよ？」
「……そう、ですか」
「うん♪」
眩しいくらいの笑みを浮かべる倉科さん。どうして僕なのだろうか？　僕では彼女の期待に応えられないと思うんだけど……
「お兄様っ！　わたしは、その女も交際も認めませんからね！」
「い、痛いっ！　沙羅、痛いから殴るのは止めてくれ！」
「バカッ！　お兄様のバカッ！　わたしという妹が居ながら他の女に手を出すだなんて最低です！」

恋がしたいと言って、僕のところに転がりこんできた幽霊の倉科渚さん。

とりあえず友達から始めることにしたけどこれから先、不安しかないよ。

まぁでも、とりあえずは――沙羅の攻撃を耐えることに集中するとしようかね。

「お兄様のバカ――ッ！」

1―2　妹の暴走・・・

「まったくお兄様は……まったく！」
怒りを露わにしながら僕に暴力……もとい説教をする沙羅。普段から、沙羅に怒られなれているから耐えられるが、それでも身体が痛いのには変わりはない。
とにかく今は、沙羅の怒りが治まるのをじっと待つだけだ。
「輝くん、大丈夫？　痛いの痛いの飛んでけー♪」
「く、倉科さんっ！？」
そんな小さな子供にするようなことをしても意味は……
「お、お兄様……」
間違った方向での意味はあったのかもしれない。沙羅が叩いた場所を倉科さんが撫でることにより、沙羅の怒りのボルテージがあがっていっている。
「つい先ほど説教をしたばかりだと言うのに……」
再び身体をプルプルと震わせながら鋭い眼差しを僕に向ける。
「さ、沙羅……少し落ち着いて欲しい」
僕は何一つ悪いことをしていない。今のこの状況は、様々な誤解が生んだ出来ごとにすぎないんだ！　それに僕はこうしてきちんと沙羅に謝っているだろ？　だから、その振りあげた拳を降ろして欲しい。
「お兄様には一度、きちんとした教育が必要なようですね」
「何を言って……」
きちんとした教育って何だよ！？　そしてお願いだから、その拳を僕に振りおろそうとしないでくれ！
「沙羅ちゃん。あまり怒ってると顔に皺が寄っちゃうわよ？」

「誰のせいで怒っていると思っているんですか！　あなたが居なければ、わたしだって
お兄様を怒ろうとは思いませんよ！」
「私が居るかどうかは関係ないんじゃないかしら？」
「――っ、関係あります！　人であれ幽霊であれ、お兄様に近づく女は全部悪なんです！」
「いくらなんでも横暴じゃないかしら？」
「横暴なんかじゃありません！　お兄様に近づく害虫を駆除するのは昔からわたしの
役目なんです！　ええ、そうです。害虫は駆除しないといけないんです」
「害虫は言い過ぎでしょ。せめて、綺麗で可憐なお姉さんと言って欲しいわ」
「何をふざけたことを言っているのですか？　綺麗で可憐等という言葉は、わたしに
相応しい言葉であって、あなたなんかには似合いませんよ」
ぎゃーぎゃーと、口喧嘩を始める二人。まぁ、口喧嘩と言っても、沙羅が一方的に文
句を言って、倉科さんが受け流しているような感じだけどね。
だからといってこのまま眺めているわけにはいかない。二人の喧嘩を止めなければ……
「もしかして沙羅ちゃん。私に嫉妬してる？」
「はぁ！？　そんなのするはずがないじゃないですか！」
「そうだよね。愛しのお兄ちゃんを取られて嫉妬してるんだよね♪」
倉科さんも煽りだしたし、いい加減に止めないと流血沙汰になりかねない。
嫌だけど……死ぬほど嫌だけど、止めるしかないよね？
「……はぁ」
覚悟を決めて二人の間に立つ。
「二人共、そこまで。喧嘩なんかしても意味がないだろ。まずは落

ち着いて話しをしようよ」
「ですが、お兄様……」
「沙羅は聞き分けのいい子だろ？　それに倉科さんも無駄に沙羅を煽らないで下さい」
どうせ倉科さんのことだから、面白がって沙羅を煽ってたんだろうけど。
「お兄様がそう言うのでしたら……」
「まぁ私はどうでもいいんだけどね♪」
そう言って僕に抱きついてくる倉科さん。
「ちょ――っ、倉科さん！？」
「あ、ああ、あなたはまた！　ゆ、許せません！　あなただけは許せません！」
僕の介入も空しく再び口喧嘩が始まる。結局、僕には二人を止めることなんて出来ないのだろうか。
二人を止めるのを諦めて、口喧嘩を見守る。たぶん大丈夫。二人共節度を守って喧嘩をするよね？　大丈夫……だよな？
「まったく、あなたはわたしの話しを聞いているのですか！？」
「ふふ、あー楽しい♪」
沙羅とのやり取りを心の底から楽しんでいる様子の倉科さん。正直言って、楽しいのはあなただけですからね。

「はぁ……なんとか落ち着くことが出来た……」
あれから一時間くらい同じようなやり取りをして、ようやく収まった。単純に口喧嘩をするのに疲れただけのような気がするけどね。
「倉科さん、あまり面倒なことはしないでくださいよ」
「あはは、ごめんね♪　こうやって、誰かと口喧嘩をするのが久しぶりだったから、つ

い嬉しくなっちゃってね」
　そうか……倉科さんは死んでしまっているから、さっきみたいに誰かと口喧嘩をすることも出来ないんだよな。霊感の強い僕や沙羅だから出来る行為。だからつい嬉しくて
沙羅を煽っていたのか。
「沙羅ちゃんも私の気持ちに気付いてくれてたから、一時間も付き合ってくれたんじゃないのかな？」
「沙羅が……？」
　確かにアイツは気の利く奴だけど、本当にそれだけの理由で一時間も付き合ったのだろうか？
　何故だか、僕には違う理由もあるような気がする。
「うんうん、あんな子が私の妹になるなんて嬉しいわね♪」
「は？　妹……？」
「そうよ。だって私と輝くんが正式に結婚をしたら、沙羅ちゃんは義妹ってことになるんでしょ？」
「や、まぁ……そうなんですけど」
　僕は一度でも倉科さんと結婚をするとか言いましたっけ？　僕の記憶では一切ないんですけど。
「わたしも結婚なんて認めてませんけど？」
「沙羅……」
　部屋着に着替えてリビングへと戻ってきた沙羅。と、言っても沙羅の部屋着はヒラヒラ
としたものが多く、僕から見ると窮屈そうに感じる。
　それでも沙羅は、そういう服を好んで着ている。
「おっ、沙羅ちゃんの服可愛いわね」
「あなたの服もそれなりに可愛いですよ。渚さん」
　いつの間にか、沙羅が倉科さんのことを名前で呼んでいる。さっきの喧嘩である程度
打ち解けることが出来たみたいだね。

多少、言葉にトゲを感じはするけど、二人が仲良くしてくれるのは嬉しい。
成り行きだけど、これから先一緒にいることが多くなると思うし。
「えへへ、凄いでしょ？　これ私のお気に入りの格好なんだ。白いワンピースっていうのが純真な私に合っていて素敵じゃない？」
純真かどうかは知らないけど、白いワンピースは確かに似合っている。
「ふふ……食い入るように見て、もしかして惚れちゃった？」
「お兄様っ！？」
「……そんなことないですから」
だから沙羅もそんな恐ろしい顔で僕を見ないでくれよ。
「あらら、残念。輝くんが惚れてくれたのなら、お姉さんが少しサービスをしてあげようかと思ったんだけどね……」
チラリと裾を掴み太ももを露わにする。
「お兄様っ！」
僕がジックリと観察するよりも早く沙羅が僕の前に立つ。
「お兄様！　渚さんのを見るより、わたしのを見てください！」
倉科さんに対抗するようにスカートの裾を捲り、下着が見えそうなギリギリの位置まで持ってくる。
「さ、沙羅っ！？」
「ほら、わたしの方が彼女よりも若いですし、何より肌に瑞々しさがあります！」
お、お前は何バカなことを言っているんだ！？　若いとか瑞々しいとかそういう問題じゃなくてだな――
「ふ……っ、沙羅ちゃんは何も分かっていないわね。確かに沙羅ちゃんの方が若いけど、

私には若さでは補えない年上の魅力というものがあるのよ」
「でも、お兄様は若い方が好きなはずです！」
「そうかしら？　それは沙羅ちゃんの勘違いなんじゃないの？」
「いいえ、事実です！」
　再び、口喧嘩が始まる。それにしてもこの二人、よく飽きもせず口喧嘩が出来るな。
「そこまで言うのなら輝くんに決めてもらいましょうか？」
「ええ、いいですよ！　お兄様ならわたしを選んでくれるはずですから！」
「え、ちょ――っ」
　何で、そこで僕に答えを委ねるような流れになるの！？　倉科さんか沙羅のどちらかを選ぶだなんて究極の二択、答えられるわけがないじゃないか。
「さ、輝くん。私と沙羅ちゃん。どっちがいいか答えてようだい」
「お兄様。分かってますよね？」
　二人からかけられるプレッシャー。どちらかを選ばないといけない究極の選択。
「さぁ！」「さあ！」
「え、えっと……」
　冷や汗がだらだらと背中を流れる。に、逃げたい。とにかく物凄く逃げ出したい。
　だけど、二人が僕を逃がしてくれるはずもなく……
「ふ、二人ともいいと思うよ……？」
　僕が出せる精一杯の答え。これが二人を比べなくて済む、究極の答えだと思う。
「輝くん……」
「な、なんでしょうか？」
「お兄様。わたし達が、そんなくだらない答えで納得すると思いますか？　きちんと、
どちらの方がいいか答えてください」

「そうよ。輝くんが単純にいいって思った方を言えばいいだけなのよ」
その単純が物凄く難しいんですよ。
二人のことだから、選ばれなかった方は普通に僕に八つ当たりをするんでしょ？
そんな未来が分かりきっているのに、選ぶことなんて出来ないよ。
これはもう、一か八か――
「逃げるしかない！」
無理だとは思うが、それでも少しでも可能性があるのならば賭けてみるしかない。
何処でもいいから、誰にも邪魔をされないような場所へと――
「あ、お兄様っ！　何処に行くのですか！？」
「輝くん！　答えを出さずに逃げるのは男としてダメでしょ！」
「ごめんなさい！　本当にごめんなさい！」
二人に謝りながら必死に逃げだす。誰か、誰か僕を助けて下さい！

若干、涙目になりながらある人物の家へと逃げ込む。
「洋介！　洋介！　助けてくれ！」
友達の洋介の家の玄関を何度も叩きながら、助けを呼ぶ。今の僕が頼れるのはコイツ
しかいないから。コイツならきっと僕を――
「そんなに慌ててどうかしたのか？　また沙羅ちゃんの制裁を受けているのか？」
「そんなんじゃない！　いいから早く僕を匿ってくれ！」
あの二人が来る前に僕を匿ってくれ！
早く、早く匿ってくれないとあの二人が来て――
「……？　よくわからんが、まぁとりあえずあがれよ」
「ああ、助かるよ」

まだ二人は追いついていないみたいだね。これで洋介の家に隠れ

れば助かるんだ！
あの悪魔から逃れられるんだ！

1―3　友達の家で・・・

洋介の自宅に逃げ込み、あの二人から逃げられると思っていたのに……

「あ、お兄様。遅かったですね」

「輝くん。答えを保留にしたまま逃げるのは、どうかと思うわよ」

「う、嘘でしょ……？」

何で二人が洋介の家に居るんだ？　僕がここに来ると確定してるわけではなかったはずなのに、何で当たり前のように洋介の家に来ているんだよ！

「お兄様の思考なんて簡単に読めます」

「私はよく分からないけど、沙羅ちゃんが自信満々だったからね」

「お兄様への愛の力です！」

愛の力かどうかは知らないけど、現実として追いつかれてしまったわけで……

洋介には悪いけど、このままま逃げた方がいいのかもしれない。

「飲み物は適当にジュースとかでいいよな？」

「洋介……」

せっかく僕が逃げ出そうと思ってたのに、何を呑気に飲み物を持ってきているんだよ。

そんなことされたら、逃げにくいだろ。

「お兄様。とりあえず座りませんか？」

笑顔でニッコリと微笑む沙羅。だけど僕には分かる。表情は笑顔でも心の中では一切笑っていないということを。

本当なら今すぐにでも僕に怒りをぶつけたい。そんなことを考えているに違いないな。

場所が場所だから怒ることが出来ない。沙羅は外ではかなりネコを被っているからね。

そういう意味で言えば、むしろ洋介の自宅に居座る方が安全なの、かな？
「ねぇ、輝くん。彼は私のこと、見えたりはしないのよね？」
僕の服を引っ張りながら倉科さんが問いかけてくる。
「見えないはずですよ」
洋介は霊感がないし、恐らく倉科さんを見ることは出来ないだろう。
「そっか……それは残念だね」
「え……？」
「だって、輝くんの友達なら一緒に会話とかしてみたかったんだけどね」
「倉科さん……」
「そうしたら、輝くんの恥ずかしい過去とか聞くことが出来たのに」
――よかった。洋介に霊感がなくて本当によかった。もし霊感があって、倉科さんと
会話をすることが出来たら、アイツのことだから余計なことを言ってしまうだろう。
だから本当に洋介に霊感がなくてよかったと思うよ。
「どうしたんだ？　なんだか安心したような顔をしてるが」
「実際に安心してるんだよ。お前に霊感がなくてよかったなと」
「はぁ？　何を言っているんだ？　もしかして俺の部屋に幽霊でもいるのか？」
「さぁ……ね」
倉科さんが居るけど、それを洋介に言っても意味はないだろう。
見ることも感じることも出来ないのなら、何も知らない方がいい。そっちの方が余計な心配をかけなくて済むからね。
「……まぁいいけど。それよりもあんなに息を切らして、なにかあったのか？」
当然の質問。家にあげる前に聞かれなかっただけでも感謝するべ

きなのだろう。
と、言っても結局はこの二人から逃げられなかったから意味がないんだけどね。
「あったけど、もう終わったからいいや」
「なんだそれ」
呆れつつも、それ以上何も聞いてこない洋介。コイツのこういうところは何気に好きだったりする。コイツと友達でよかったと思うよ。ある一つのことを除いては――
「それよりもな輝。俺の話しを聞いてくれよ」
「何だ？」
「俺の可愛い、可愛い妹の紫のことなんだけどさ――」
ある一つのこと。それは洋介は超、がつくほどのシスコンだということだ。
コイツが妹の話しを始めると一時間や二時間は平気で消費させられる。写真を取り出してあの時の妹が――この時の台詞がさ――などと、思い出を語っていくのだ。
これがなければ最高の友達なのだろうけど、洋介のシスコンという病気は治らないらしい。
しかも、僕の前で話すのならまだいいけど、沙羅の前で妹の話しをし出すと沙羅の奴が妙にテンションがあがっていくんだよね。
「ふふ……洋介さんと紫ちゃんは本当に仲のいい兄妹ですね♪」
「まぁな！　俺と紫は最高の兄妹だよ！　紫、愛しているぞー！」
人前で堂々と実の妹に対しての愛を語る洋介。あまりの光景に倉科さんが固まってしまっている。
「……」
「倉科さん、大丈夫ですか……？」

ボソっと小さな声で倉科さんに問いかける。僕の声を聞いた瞬間、ハッとした顔を浮かべ――
「……私も負けてられないわね。もっと輝くんと……」
等と、的外れなことを呟いた。
「……はぁ」
洋介のシスコントークに沙羅の相槌。これはもう三時間くらいは話しが終わらないだろうな。
部屋の時計に目をやり、話しが終わるであろう時間を計算してガックリと肩を落とす。
洋介の家に逃げ込んだのは最悪の一手だったかもしれないな。

「いや、ほんとあの時の紫がさ――」
「まぁ、それはそれは微笑ましいですね♪」
はい。もう話し初めてから三時間も経過してますよ。それなのに一向に終わる気配がない。
二人が話しで盛り上がっている間、僕と倉科さんはただひたすらポリポリと洋介が用
意してくれた煎餅を食べていた。正直、顎が疲れてしかたがない。
「輝くん……暇だね」
「そうですね。暇ですね」
洋介がいる手前、あまり派手に会話をすることが出来ないので、ただ座って煎餅を食
べることしか出来ない。まったく、何でアイツは妹の話しなんかをし出したのだろうか。
「紫！　絶対に、お兄ちゃんと結婚しような！」
拳を天に突き上げながら結婚の宣言をする洋介。この場に紫ちゃんがいなくてよかっ
たと思うよ。もしこの場に居たら絶対に面倒なことに――
「紫。紫。紫ー！」
「お兄ぃー！　大きな声で気持ちの悪いことを叫ばないでよ！」

「ぐはっ！？」
洋介の背中にいい角度で紫ちゃんのドロップキックが入る。
「あまり大きな声で叫ばないでよ！　お兄ぃの声、外まで聞こえてたんだからね！」
洋介の紫ちゃんへの愛の言葉が家の外にまでか……僕が紫ちゃんの立場なら恥ずかしさで死にたくなるね。
「ゆ、紫の愛情は相変わらずキツイな……」
思いっきりドロップキックをくらったというのに、どこかいい笑顔で立ちあがる洋介。
あれだけのダメージを受けて、平然としてられるのは凄いと思うよ。
「まったく、お兄ぃは気持ち悪いんだから……死なないと治らないのかな？」
真顔でとんでもないことを言う紫ちゃん。まぁでも、洋介なら喜んで死んでくれるかもしれないな。『紫がそう言うのならお兄ちゃんは喜んで死んでやろう』って……物凄く潔いけど、実際はカッコ悪いよね。
「紫ちゃんは相変わらずだね……」
「――え？　あ、あぁ！　輝さん！？　来ていたんですか？　来るのなら来るってちゃんと言ってくださいよ。そうしたらあたしも色々と準備が――」
僕の姿を見た瞬間、急にもじもじとしだす紫ちゃん。別にそこまで準備をしてもらう必要はないよ。ただ逃げてここに来ただけなんだから。
「いや、そこまでしてもらわなくてもいいよ」
「そ、そうですか？　えへっ、えへへ……それにしても今日はいい天気ですね」
「そうだね」

何でいきなり天気の話しをしだしたのだろうか？　と、いうよりだいぶ日も落ちてきたんだけどね。そろそろ自分の家に帰りたい。
「あ、あの……よかったらうちで晩御飯を食べていきませんか？」
「え、でも……」
確かに、時間的にはそろそろお腹も空いてくるころだし、僕も何かを食べたいとは思うけど、そこまでお世話になるのは悪い気がする。
「紫ちゃんが晩御飯を用意する必要はありませんよ。お兄様はわたしの手作りの晩御飯を食べますので」
沙羅が会話に割って入ってくる。
「でも、今から家に帰ってご飯を作ると遅い時間になるんじゃないの？」
「関係ありませんよ。ご飯の支度はすでに終わっていますので」
「うぐ……っ」
いつの間に晩御飯の支度をしていたのだろうか？　そんな余裕はどこにもなかったはずなのに。
「でもでも――」
「お兄様に紫ちゃんの手料理を食べさせるわけにはいきません」
頑なに紫ちゃんの手料理を僕に食べさせないようにする沙羅。何で紫ちゃんの手料理を食べさせてはもらえないのだろうか？　紫ちゃんの料理がマズイって話しは聞いたことないんだけどね。洋介だって自慢げに『紫の料理は世界で一番美味い』って言っているし、迷惑でなければって思うけどね。
「お兄様、帰りますよ」
「沙羅っ！？」
僕の服を引っ張って家に帰ろうとする沙羅。

「あまり遅くまでいては、何をされるか分かりませんからね」
「別に何もされないだろ」
まぁ、洋介のシスコントークは続けられるのだろうけどね。
「いいえ、きっと何かをされるはずです。それに渚さんが退屈そうにしてますよ」
「う……っ」
確かにここに居座っては、倉科さんが退屈なだけか。それを考えると退散した方が……
「輝くんの好きにしていいわよ？」
「……はぁ。ごめん二人とも帰るわ」
「お、そうか」
「帰るんですか……」
二人とも寂しそうな顔をしている。しかし、こっちにも寂しそうな顔をしている幽霊
がいるから……だから今回は、倉科さんを優先させてもらおう。
「お兄様♪　では、帰りましょうか」
「ああ。倉科さんも帰りましょう」
洋介達には聞こえないような声で倉科さんに声をかける。
「分かったわ。帰りましょう」
僕の手を取り、前へと進んでいく。瞬間、沙羅が鬼のような形相を浮かべた気がした
けど、余計なリアクションを取るわけにはいかないし、無視をしておこう。
「じゃあな洋介」
「ああ。また今度、紫の話しをしてやるよ」
「お兄ぃ！　だからそんな話ししないでってば！
えっと……輝さん、また今度暇な時にでも来てください。その時はちゃんと準備をしますので」
「はは、そんなことしなくてもいいのに」
「いいんです。だってあたし輝さんのこと――」

「お兄様。行きますよ」
「ああ。じゃ、二人ともまたな」

二人に手を振りながら洋介の家を後にする。さて、自分の家に帰ってゆっくりとするかね。
今日はなんだか無駄に疲れたから――って、あれ？　何でこんなにも疲れてたんだっけ？
確か、洋介の無駄に長い話しを聞かされてそして……あぁ、元々は倉科さんと沙羅から逃げていたんだった。
それで身体の方も疲れていたのか。
「お兄様？　分かっていると思いますけど、帰ったら答えを聞かせていただきますよ」
「――あ、そうだった！　まだ輝くんの答えを聞いていなかったんだった！」
沙羅の奴、覚えていやがったか。倉科さんは普通に忘れていたというのに。
「答えてくれるまで、ご飯は食べさせませんからね♪」
「な――っ！？」
食べ物を取り上げるのはズルいだろ！　それだけはやってはいけないことだ！
「食べたいのでしたら、きちんとした答えを出してください。そうすれば食べさせてあげますよ」
悲しいことに家の料理は沙羅が担当している。そんなわけで僕に何か料理を作るスキルがあるわけもなく、ここはもう大人しく沙羅の言うことを聞かなければならない。

「お兄様、わたしの方が好きですよね？」
「輝くん。私の方だよね？」

「家に帰るまで待っててください」
とにかく家に帰りつくまでに何か方法を考えなければならない。
何か、この危機を
脱する究極の答えを――
やっぱり土下座しかないかな？　いや、それは最後の手段だ。それ以外で何かいい方
法を考えて……考え――つかねぇ！　これは本気で土下座を覚悟しておいた方がよさそうだ。

１―４　罰を言い渡します・・・

「お兄様は、本当に優柔不断でだらしがないのですから……」
「ごめんなさい。優柔不断でごめんなさい」
何も考えつかないまま家に帰り、どちらがいいのか沙羅と倉科さんに詰め寄られ選ぶ
ことの出来なかった僕は、土下座をするという賭けに出た。
そして、その結果は散々なもので――

「いくらなんでも今日一日で殴りすぎだろ……」
見た目に分かるほどの怪我はしていないが、身体のあちこちに痣が出来ている。沙羅
のこういう他人にはバレない程度の暴力の振り方は芸術的だと思う。
「お兄様、何か言いましたか？」
「何も言ってないし、僕が何か言うと思うか？」
これ以上、余計なことを言えば再び沙羅に叩かれてしまう。わざわざ殴られるために
発言をするだなんて変態的趣味は持っていないよ。
「輝くんの煮え切らない態度は私も擁護出来ないわね」
「倉科さん……」
僕のこの今の状態は基本的にあなたのせいなんですけどね。あなたが僕の所に来て、
恋をしたいなどと言わなければ……
「女の子を焦らしちゃうような悪い子には罰が必要だと思うの」
「罰……ですか。渚さん、それは基本的にどんな罰なのでしょうか？」
「ふふふ……気になる？　気になっちゃう？」
「はいはい。気になりますからさっさと言って下さい。あと、その言い方かなりウザいですよ」

「そこまで言わなくてもいいじゃない。それにこれは沙羅ちゃんにとってもオイシイ話
しだと思うんだけどなぁ……」
「分かりましたから、早く言ってくださいよ。お兄様への罰とやらを」
僕を完全に無視して話しを進めていく二人。しかも罰って、僕そこまで悪いことしてないよね！？　それなのに罰っておかしくない？
「輝くんへの罰、それは――」
「それは？」
倉科さんが焦らすように一度、言葉を区切る。正直、倉科さんの発表を止めたいけど、
どうせ止めることなんて出来ないんだろうね。
僕がどれだけ騒いでも意味のないものになるだろう。
「私達二人とデートをすることなのです！」
無駄に効果音でもつきそうなほどの勢いで罰を告げる。
倉科さんと沙羅の二人とデートをしろだって！？　なに罰なのかも分からないし、それが罰であるのならば僕としては勘弁して欲しい。
この二人とデートして無事で済むはずがないのだから。
「デート……ですか」
「そう、デート。二人一緒にじゃなくて、一人づつ個別にするんだよ」
「なるほど。一対一の真剣なデートですか」
一対一であることに間違いはないけど、沙羅の言い方だと、まるで今から果たし合いでもするかのような言い方だ。
いや、僕にとってはある意味で果たし合いのような物なのかもしれない。場合によっては死を招いてしまうほどの……

「私と沙羅ちゃんは輝くんとデートが出来るし、輝くんはちゃんと私達をエスコートしないといけない。これって立派な罰だよね？」
だよねとか言われても非常に困る。僕にとっては明らかな罰だけど、それを二人に対して言ってもいいのだろうか？　一応、倉科さん自身が罰だと言ってはいるけど、何故か頷いてはいけない気がする。
僕の中の何かが頷いてはいけないと、全力で警報を鳴らしているんだ。
「渚さんのその考えは素敵ですね。ついでですから、お兄様にはデートが終わったら、改めてどちらがいいのか答えてもらいましょうかね」
「その問いかけだけは勘弁して下さい！」
すぐさま沙羅に土下座をして、お願いをする。デートをするのはまだいいけど、その後の問いに答えるのだけはマジで勘弁して下さい！　もう二人に怒られるのも、沙羅に叩かれるのも嫌なんだ！
「いいえ、いくらお兄様の頼みでも聞くことは出来ません」
「そ、そんな……」
鬼だ！　悪魔だ！　目の前の妹は最悪の人でなしだよ！
「お兄様、何かとても失礼なことを考えてませんか？」
「……考えてません」
危ない……危うく、表情に出るところだった。ここで余計に沙羅を怒らせるわけにはいかないからね。
「まぁまぁ、沙羅ちゃん。そんなことよりも一ついい事を教えてあげましょう」
「何ですか？　あまり期待は出来ないんですけど」

「えー、デートの件で見直してくれたんじゃないの？」
「気のせいですよ」
「まぁいいけど……それで話しの続きなんだけど――今回のデートは輝くんへの罰でもあるわけなのよ」
「それは分かってます」
「だから、罰なんだからデート中、何でもお願いを聞かせることが出来ると思わない？」
「――――っ！？」
「例えばキスとか……」
「な、なな、な……」
秘密の会話のように見えて、物凄く僕の耳にまで聞こえているんですけど。
これって、もしかしてわざと聞こえるように言ってる？　デート中、私達のお願い事を聞けよと先制の意味も込めて。
「場合によってはキス以上のこととか出来ちゃうかも……」
「き、キス以上の出来ごとってまさか――」
「そう。そのまさかよ。輝くんなら必ず応えてくれるはずだわ」
「あ、あわわわ……」
肝心な所で言葉を区切ってるけど、一体僕に何をさせる気なのだろう？
二人にとっては共通の認識みたいだけど、全然見当もつかない。ただ唯一分かることは、僕にとっては碌でもないということだけだ。
「あの……念のために聞いておきたいんですけど、これって僕に拒否権はないですよね？」
話しの流れからしてないのは分かっているけど、聞くまでは確定事項ではないから。
限りなくゼロに近い可能性でも賭けてみたくはなるじゃないか。

「あるわけないでしょ」
「そうですよ。お兄様は一体、何をバカなことを言っているのですか」
「ですよねー」
これで二人とデートをするのが確定してしまった。二人とのデート……か。僕がきちんとエスコートをしないといけないみたいだけど、デートとか生まれてこのかた一度もしたことがないから、どうすればいいのか分からない。
こんなことで二人を満足させられるというのだろうか？　いや、満足させないといけないんだ。
はぁ……出来る事なら今すぐにでも逃げ出したいよ。

「ん～いい天気だ。これは絶好のデート日和だね」
「……そうですね」
晴々とした天気に嬉しそうな笑みを漏らす倉科さん。倉科さんの提案によりデートをすることになった。最初は倉科さんとデートをし、次に沙羅とデートをする。
優柔不断な僕に対する罰らしいけど、正直ただ単に倉科さんがデートをしたかっただけなんだろうね。
「まずは何処に行くの？　きちんとエスコートしてくれるんだよね？」
「一応、公園に行こうかと」
「公園に？」
「はい。本当なら遊園地とかがいいんでしょうけど、人気の多い所だとあまり会話とかも出来ませんし、なによりゆっくり出来ないじゃないですか」
倉科さんは幽霊だから、普通の人には見えることは出来ない。それなのに人気の多い

所に行って会話とかをしてたら僕が不審者として警備員に捕まってしまう。そうしたら
このデートはそこで終わってしまうわけで――安全性や僕達の状況を考えると、あまり
人気のない公園とかの方が無難だと思う。
「そう。輝くんが公園がいいって言うのなら私は構わないけど……
でも、輝くんってエッチだね」
「は……？」
何で公園に行くだけでエッチと言われなければならないんだ？
公園なんて何処にも
エッチだと言われる要素はないのだけど。
「だって、人気の少ない公園に私を誘って何をするつもりなのかしら？」
ポッと頬を赤く染めながら照れたように目を逸らす。
「は、はぁ！？　何を言っているんですか！　そ、そんなつもりで公園に誘ってるわけじゃ――」
僕は純粋に倉科さんにデートを楽しんでもらおうと思って、頭を必死に回転させて
色々と考えたというのに。
「あはは♪　冗談だよ。そこまで動揺しなくてもいいんじゃないかしら」
「……」
こ、この人は……
「あぁ、もう……そんな風に怒らないでよ。せっかくのデートなんだから」
「怒ってなんかいませんよ」
ただ少しだけ呆れてるだけですよ。冗談を言うのは構わないですけど、もう少し笑え
る冗談にして下さいよ。ハッキリ言って、さっきのは笑えないですからね。

主に僕だけが……ですけど。
「はいはい。そんなに拗ねないの。ほら、行きましょう」
「……ぁ」
倉科さんが僕の手を取り公園へと向かって歩き出す。
「ね、笑ってデートを楽しみましょ」
「……そうですね」
憮然とした態度でデートなんかしても楽しくはない。どうせなら笑って、この瞬間を
楽しみながらデートした方が何倍もいいだろう。
「それじゃ、公園に向かってれっつごー♪」
年齢に見合わないほどのテンションで前を歩いていく倉科さん。
「輝くん。少しテンションが低いわよ？　もうちょっとテンションをあげていきましょ！」
「はぁ」
デートを楽しみたいとは思うけど、倉科さんほどテンションをあげるのは難しい。
もともと僕はそんなにテンションが高いタイプじゃないし。
「ほら一緒に――れっつごー♪」
「れ、れっつごー」
「低い！　低すぎるよ！　もっと心の底から声を出して――！」
「あの、倉科さん。いくらなんでも大きな声を出したら不審者扱いをされてしまます」
ここは普通に住宅街なんだから、こんなところで一人寂しく（基本的に倉科さんを見
ることが出来ない人からすれば）叫んでいる人間がいたら、通報物だよ。
「うぅ……それなら仕方がないのかな？」
「仕方の無いことですよ。そのかわり、ちゃんとデートではエスコートするので許してください」
綿密……とまではいかないけど、それなりにプランは考えてきて

いるので、エスコー
トをすることくらいは出来るはずです。
「信じていいの？」
「可能な限り努力します」
「言い切って欲しいけど、とりあえず納得しますか。じゃ、きちん
とエスコートしてね」
「はい」
自信があるわけじゃない。だけど、倉科さんのために一生懸命考
えてきたんだ。
だから予定通り行動すれば――そういうわけだからまずは公園だ。
公園に行って倉科さんをきちんと楽しませよう。そう意気込みな
がら公園へと向かって行った。

１―５　倉科渚の場合・・・

「公園に着いたわよー♪」
公園に着いたとたんに両手をあげて喜びを全身で表す倉科さん。
「では、まずは軽く公園内を歩きましょうか」
公園といっても小さな公園ではなくて、ゆっくりと散歩が出来るくらいには広い公園なのだ。
その広い公園を二人で一緒に歩く。それだけで十分デートといえるだろう。
「輝くん」
「何ですか？」
公園内を歩こうと足を踏み出すと、倉科さんに呼び止められる。
「手……繋ご」
そっと、倉科さんが手を差し出す。女の子と手を繋ぐなんて恥ずかしいけど、これはデートなわけで、手を繋ぐのは普通のことなのだろう。
「……分かりました。手を繋ぎましょう」
差し出された手を握り、前へと歩き出す。手の平に感じる倉科さんの温もりが妙に気恥ずかしいけど、何処となく安心するのは何故だろうね。
「こうして手を繋いでると、なんだか安心するね」
「……そう、ですね」
倉科さんも僕と同じような感想を抱いていたようだ。それはそれで嬉しいな。
同じ気持ちを抱きながら広い公園を二人で歩いていく。きっと他の人達から見たらお子様のようなデートに見えるだろう。だけど、僕達にとってはこんなデートが似合っているような気がするよ。

手を繋ぎながらの公園内の散歩。特に会話らしい会話もせず、ただ単純に歩いて回る。
倉科さんにとっては退屈なデートかな、と思ったけど思いのほか楽しんでくれているようだ。
「こんなにもゆっくりと歩いて回ったのは、死んでから初めてかも」
「楽しんでいただけたのなら幸いですよ」
罰としてのデートだけど、どうせなら倉科さんには楽しんで欲しいから。
「うん。でもまだこれで終わりじゃないんでしょ？」
期待に満ちた表情で僕を見つめてくる。確かにこれで終わりではない。一応、初めてなりにデートプランを考えてはいるのだから。
「はい。そろそろお弁当をたべようかと思ってます」
「お弁当……？」
「はい。本当は僕が作ってくるのがよかったんですけど、残念ながら沙羅が台所に立たせてくれないから、沙羅の手作りにですけど」
沙羅は渋々といった感じで作ってくれたけど、それでも味の方は保証出来るだろう。
「沙羅ちゃんの手作りなんだ。それは結構楽しみかも♪」
「じゃあ、そこに座って食べましょう」
「そうだね。早速食べちゃいましょう」
近くにあったベンチに腰をかけ沙羅に作ってもらった弁当を広げる。
「おぉ……これはなかなか豪華な……」
「沙羅ちゃん、かなり気合いを入れて作ってくれたんだね」
渋々作っていたわりには、気合いが入りすぎだろ。こんな豪華な弁当、普段でもあまり見ることは出来ないぞ。

「ふふ……これは沙羅ちゃんに感謝しないといけないかも」
弁当のおかずを箸で掴み、何故か僕の方へと向けてくる。
「……何ですか？」
「聞かなくても分かってるんでしょ？　ほんと、輝くんは照れ屋さんなんだから」
「うるさいですよ」
箸を向けられてすることなんて一つしかないけど、そんなことをするなんて恥ずかしいじゃないか。
いくら人気がないといっても『はい、あーん』は恥ずかしすぎる。
「ほらほら、早く口を開けちゃいなさいよ♪」
「……」
い、嫌だ……『はい、あーん』をするのは絶対に――
「してくれないの……？」
「うぐ――っ」
倉科さんが瞳をうるうるとさせながら僕を見てくる。そんな瞳で見られたら逆らいにくじゃないか。
「ほら、あーん」
「……あ、あーん」
大人しく口を開けて食べる。口の中に広がる沙羅の作った料理。
気合いを入れて作っているだけあってかなり美味しい。さすが沙羅だよ。
「美味しい？　輝くん」
「はい。倉科さんも食べてみてください」
「そうだね。あーん」
先ほど僕がやったように口を開ける倉科さん。これってまさか――
「もしかして、僕が食べさせるんですか？」
倉科さんがやったように『あーん』て言いながら食べさせないといけないのか？
「当たり前でしょ。私にも食べさせて♪」
再び口を開き食べさせるように要求してくる。このまま口を開け

させているわけにも
いかないから、諦めて倉科さんの口の中に料理を運ぶ。
「……ん、あむ」
「どうですか？」
「美味しいね。さすが沙羅ちゃんだよ」
倉科さんも美味しそうに、沙羅の作った弁当を食べる。
交互に食べさせあいながら、昼食を楽しむ。周りに誰も居ない二人だけの空間。
恋人のような空気感ってわけじゃないけど、それに似たような空気が出ている。
妙に甘酸っぱい空気感。それが僕を照れくさい気分にさせる。
「なんだかこれって、恋人のようなやり取りみたいだね」
「そ、そうですね」
互いにご飯を食べさせあう。それは間違いなく恋人同士のやり取りだ。
「えへ、えへへっ♪」
よほど嬉しかったのか、倉科さんが顔をだらしなく緩ませる。
「く、倉科さん！　また少し歩いて回りませんか？」
この空気に耐えられず大きな声を出してしまう。このままこの空気の中に居てしまっては変な気分になってしまう。だから気持ちを変えるために違うことをしなくては。
「いいけ、まだお弁当残ってるわよ？」
「弁当はまた後でも食べることは出来ますよ。それよりも何か違うことをしましょう！」
歩いて回らなくてもいい。弁当を食べさせ合うという行為以外なら何でもいい。
だから――
「う～ん、じゃあ輝くん、ちょっとこっちに来て」
「なんです――うわっ！？」

急に倉科さんに押し倒されてしまう。地面は芝生だったから、そこまで痛いとは思わなかったけど、多少は痛みを感じてはいる。
「な、なにをするんですか！？」
さっきのような甘い空気はなくなったけど、これはこれで気にいらない。
「それはね――こうするためだよ」
僕の頭を掴み自身の膝へと乗せる。こ、これってまさか――！？
「く、倉科さん！？　な、何をしているんですか！？」
「何って膝枕だよ？」
「何で膝枕なんかを？」
「輝くんは私に膝枕をされるのは嫌？」
「嫌とかそういう問題じゃなくて……」
うぅ……っ、こ、後頭部に倉科さんの柔らかい太ももの感触が……なんか妙に甘い香りがするし、それに倉科さんの顔も近い。
「男の子に膝枕をするの、憧れてたんだよね♪」
満足そうに僕の頭を撫でる倉科さん。文句を言ってやりたい。そんな風に思うんだけど、倉科さんの嬉しそうな顔を見るとやはり何も言えなくなってしまう。

「あら？　輝くん、大人しくなったわね」
「暴れても無駄になりそうなんで」
念のために言っておくけど、決して倉科さんの太ももが気持ちいいから大人しくなったわけじゃないからね！　僕はただ倉科さんの想いに応えてあげただけなんだから！
ほんとは、こんな風に膝枕をされるなんて嫌すぎるけど、仕方なくなんだよ。

そう、仕方なくなんだ。ほんとはかなり嫌なんだけどね！
「輝くん、気持ちよさそうな顔をしてる」
「……」
いや、ほんとだからね！　この表情もわざとだし、倉科さんを悲しませないようにするための演技だから！　勘違いしないで欲しいよ。
あぁ、早く倉科さんの膝枕から解放されたいよ。
「うふ、ふふふふっ♪」
「何がおかしいんですか？」
「ううん。別に～♪」
なんだろ。言葉にしなくても僕の言いたいことは分かってますみたいな顔は。
もしかして倉科さんは何か大きな勘違いをしているんじゃないだろうか？
例えば、僕が倉科さんに膝枕をされて喜んでいるとか。
そんなことあるはずがないというのに……こんなムチムチで柔らかい太ももの感触を
感じて喜ぶとかあるわけがないじゃないか。
「んっ、ひゃっ……輝くんったら」
「え……？　何ですか？」
どうして急に驚いた声なんかをあげているんですか？
「いくらなんでもいきなり太ももを撫でるのはマナー違反じゃないかしら？」
「いやいや、太ももなんて撫でてませんからね」
僕がそんなことするはずがないじゃないですか。相手の許可もなく、こんなスベスベな太ももをスリスリと触るわけがないじゃないですか。
「や、んぅ……さ、触ってるから。輝くんの手が私の太ももを撫でてるから」
「ですから触ってなんかいませんて」

何回同じことを言わせるのだろうか？　いくら倉科さんの妄想でも酷過ぎるでしょ。
「だ、だったら……ぁっ、自分の手が何処にあるか見てみてよ……っ」
「自分の手ですか……」
そんなの普通に、此処に……っ！？
「な――っ！？」
何で僕の手が倉科さんの太ももにあるんだ！？　そんなところに手を持ってきたつもりはないのに。どうして！？
「ね……あったでしょ。私、嘘なんか吐いてなかったのに……」
「ご、ごめんなさい！」
「い、いいから……んぅ、早く手をどけて……」
「す、すいません！」
急いで倉科さんの太ももから手をどける。それにしても何で僕の意識していないところで手が勝手に動いていたのだろうか……？
は――っ！？　ま、まさか僕の中の第二の人格が……いや、止めておこう。この考えは無性に恥ずかしい気分になってしまう。
「もう……っ、普通のデートをするとか言っておきながら、結局エッチなことをするんだから……」
「申し訳ないです」
反論したいけど事実、倉科さんの太ももに手を置いて撫でていた身からすると下手な反論をすることが出来ない。甘んじて倉科さんの文句に付き合うしかない。
「私にエッチなことがしたいなら、初めからそう言ってくれればいいのに」
「えぇー」

「でもでも、さすがに初めてが外っていうのは嫌だから、そういうのは今度ね」
「いや、違いますから」
何かの手違いで倉科さんの太ももを撫でてしまったけど、エッチなことをしたいわけじゃない。僕は普通にデートをしたかっただけで……
「そうなの？　まぁ、でもこういうのも楽しいわよね♪」
「……ええ」
何だか全然デートっぽくないけど、これはこれで僕達らしいのかもしれないね。

これが僕と倉科さんとの初めてのデートの話し。僕が立てたプラン通りには全然進んでないし、色々と予想外なことが起きたけど、それなりに楽しんでもらえたようだ。
次は沙羅とデートをしないといけないわけだけど……
あまりいい予感がしないのは何でだろうね。沙羅のことだから、絶対に余計なことを考えていると思うんだよね。
まぁ、結局のところデートしてみないと分からないんだけどね。
……はぁ。

１―６　沙羅の場合・・・

今日は、沙羅とのデートの日だ。実の妹とのデートというのも、何だかおかしな話ではあるけど、罰として遂行しなければならないのなら、仕方がない。

「だけど、せっかくのデートなのに、家の中で本当にいいのか？」

「はい。わたしはお兄様と一緒に居られるのでしたら、場所は気にしません。まぁ、その代わり渚さんには、暫くの間席を外してもらってますけど」

「それだと、普段とあまり変わらない気がするんだよね」

ただ、倉科さんが居るか居ないかの差くらいしかない。それで本当にデートと言えるのだろうか？　それに場所が家の中だし、新鮮味がまったくない。

あと、僕の考えたデートプランがまったく意味をなさなくなってしまう。これでは、沙羅を満足させることなんて出来るわけがない。

「本当は遊園地とか映画館とかの方がよかったんじゃ……」

「お兄様はほんと、何も分かってませんね。デートにおいて場所なんて些細な問題でしかないんですよ。大事なのは誰と居るかです」

「沙羅……」

「それに、家の中でも十分それなりのことは出来ますよ。例えば、こんな風に――」

沙羅がぽすっ、と僕の膝の上に座る。

「ふふ、お兄様の上に座ってしましました♪」

凄く上機嫌な様子の沙羅。しかし、僕としては落ち着かない気分だ。

いくら沙羅が妹とはいえ、可愛らしい女の子が自分の膝の上に座っている。その事実

が僕から落ち着きを無くさせる。足に感じる沙羅の柔らかい感触。そして近づいたこと
によって、沙羅のふわりとした甘い香りが鼻腔をくすぐる。
こんな状態で、落ち着くなんてなかなか出来るものではない。
「お兄様、どうかしましたか？　顔が赤くなってますけど……」
熱を測ろうと更に顔を近づけてくる沙羅。
「だ、大丈夫。なんでもないから！」
「そうですか？　ふふ……っ」
あぁ、沙羅の奴完全に確信犯だな。僕をドキドキさせるためにわざと、こんな行動を
取っている。
「お兄様。一ついいですか？」
「な、なんだい？」
出来るだけ自分が焦っていることを沙羅に悟られないようにしつつ、言葉を返す。
まぁ、もうすでに遅い気もするけど。
「手を回してくれませんか。手を後ろから回して、わたしを抱きしめてください……」
「んな――っ！？」
後ろから手を回して、沙羅を抱き締めろだと！？　そんなの出来るわけがない。ただ
でさえ、膝の上に座られて心臓がバクバクと鳴り響いて落ち着かないのに、更にその上
から抱き締めるだなんて……
「お兄様。あまり女に恥をかかせないで下さい。それに、これはデートなのですよ。相
手の要望に応えるのも立派な務めです」
「うぐ……ぅ」
そんな風に言われてしまったら、反論することが出来ない。大人しく沙羅を抱き締め

るしかなくなるじゃないか。
「お兄様……」
「わ、分かった。抱き締めればいいんだな！」
「はい♪」
拒否するのを諦め、沙羅の身体に手を回す。
「……んっ」
両手に感じる身体の温もり。柔らかくてもちもちとした感触。これはちょっとヤバイかもしれない。
「お兄様。わたしのお尻に何か固いモノが当たっているのですが……」
「いや、それは――」
仕方の無いことって言うか、生理現象っていうか、男なら仕方がないわけで……
「……冗談ですよ？　そこまで固い感触のモノは当たってませんよ」
「ほ……っ」
それは少しだけ安心したよ。
「まぁ……少し固いのは当たってますけどね」
ボソリとだけど、確実に僕に聞こえる声で呟く。
「わたしの身体で興奮してくれたのですね」
「あ、や――違っ、これはその沙羅の身体に興奮したわけじゃ……」
何度も言っているけど、これは男として仕方の無いことなんだ。生理現象なんだよ！
「隠さなくてもいいですよ。お兄様のことは何でも分かってますので」
「――――っ」
は、恥ずかし過ぎる。妹相手に興奮してしまってるのも恥ずかしいけど、それを妹に
理解されていて、笑顔を向けられるなんて、マジで恥ずかしい。
「そういえばお兄様。気付いてますか？　わたし、最近胸が成長したんですよ」

「へ、へぇ……」
　そんなことを言われても、どう返していいか分からない。どえくらい成長したか、確
かめさせろとでも言えばいいのだろうか？
「……確かめたいですか？」
「へ……？」
「お兄様、今物凄く触りたいって顔をしてました」
「いやいやいやいや、してないから！」
「ほんとですか……？」
　沙羅の胸を触って、どれくらい成長したか確かめたいとか、全然
思ってないから！
　だから、そんな目で僕を見るのは止めてくれ！
「……残念です。お兄様が触りたいのでしたら、触らせてもよかっ
たのですけど……」
「な――っ！？」
　さ、触らせてくれるの……か？　いや待て。妹の胸を触りたいな
んて考えは変態すぎ
るだろ。そうだ、その考えは兄として間違っている。だから、ここ
での選択は――
「い、いいのか？」
　違う！　僕はそんなことを言いたいんじゃないんだ！　時間も時
間だから、そろそろ
お昼にしようと言いたいだけなんだ！　本当なんだ！
「ふふ、冗談ですよ。お兄様に触らせてもいいですけど、それはま
たの機会にしましょう。
　今は先にお昼ご飯を食べましょう」
「あ、あぁ……」
「あまりガッカリしないで下さい。美味しいお昼ご飯を用意します
から」
「ガッカリなんてしていない……」

あの、ぷくっと膨らんできた胸を揉みたいだなんて思ってもいないんだからな。だからガッカリなんてしていないし、残念だとも思っていない。
僕は純粋にお昼ご飯を望んでいるのだから。
「そういうことにしておきましょう」
沙羅がニヤニヤとした笑みを浮かべながら台所へと向かう。まったく、胸を揉みたいとか欠片も思っていないけど、僕って顔に出やすいのかな？

「はい、お兄様。お昼ご飯が出来ましたよ」
「ん、ありがと」
目の前に並べられていく料理の数々。普段よりもやや豪華な出来なのは、やはりこれがデートだからなのだろうか？
少しだけ倉科さんに悪い気がする。
「お兄様。デート中に他の女性のことを考えるのはマナー違反ですよ」
「す、すまない」
すぐに考えを沙羅に見透かされてしまう。これが妹の力なのかね。
「では、いただきましょう」
「ああ」
手を合わせ、沙羅が作ってくれた料理に箸を伸ばす。
「……うん。相変わらず沙羅の作る料理は美味しいね」
「えへへ……ありがとうございます♪」
行儀が悪いと知りつつも、席を立ち沙羅の頭を撫でる。沙羅も頭を撫でられて、嬉しそうに目を細める。
「お兄様。この料理にはお兄様への愛情がたくさん詰まっているので、たっぷりと食べてくださいね」
「言われなくてもたくさん食べるさ」

せっかく作ってくれたのに、残すなんて出来るわけがない。きちんと残さず全て食べるさ。

「ごちそうさま。美味しかったよ沙羅」

「お粗末さまです」

ご飯を食べ終わり、ソファに座ると沙羅が――

「えへへ……お邪魔します」

最初の時と同じように僕の膝の上に座ってきた。

「沙羅、別に横に座ってもよかったんじゃないか？」

「確かにそうですけど、わたしはお兄様の上に座りたいのです」

僕の上にって、どんな願望だよ。ノンビリとするのなら横に座ってくれた方がいいんだけどね。

横の方が落ち着くと思うんだよね、主に僕の精神が。

「はぅ……お兄様の膝の上は。本当に落ち着きますね♪」

実に満足そうな笑みを浮かべる沙羅。あまり僕の膝の上に座るのを気に入るのはよくないね。今はまだいいかもしれないけど、倉科さんが居る時に座られたらどうなることやら。

確実によくない感じになるだろうね。僕も倉科さんも……

「お兄様。今日はこのまま、時間になるまでゆっくりとしていましょうね」

「……僕は構わないけど、本当にいいのかい？」

今日はご飯を食べて、ただ僕の上に座っているだけだぞ。

「初めにも言いましたよね？　お兄様と過ごせるのなら、他はどうでもいいと」

「でもなぁ……」

やっぱり、物足りないような感じがするんだよ。デートらしいデートをしたいわけじゃないけど、なんだか申し訳ない気がするんだよ。

沙羅に気を遣わせているんじゃないのかってね。

「それでしたら、キスをしてもらえますか？」
「え〝っ！？」
「出来ないのでしょう？　ですから、このままジッとしているだけでいいのです」
諦めきっているような、だけどバカにされているような……ここまで言われて何もしないのは癪に障るかな。
「沙羅」
「なんです――んぁっ！？」
不意打ちぎみに沙羅にキスをする。キスといっても頬にだけどね。それでも沙羅を驚かせるには十分な行為で……
「な、なな、な……な」
壊れたラジオのように『な、なな……な』と呟き始めた。
ふ……っ、これが兄の実力だよ。妹に振りまわされっぱなしでは終わらない。
きちんと、仕返しはするのだ。まぁ、ちょっとだけ大人げない気もするが。
「お兄様にキスをされた。お兄様にキスをされた。お兄様にキスをされた……」
ぶつぶつと、念仏を唱えるかのように同じことを繰り返す沙羅。
よほど、キスをされたのに驚いたみたいだ。
「お兄様にキスを……ふにゃぁ～」
蕩けるようにその場に倒れ込む沙羅。あ～あ、これは暫く起きないかもしれないな。
時間もいい感じになってきたし、今日のデートはここで終わりかな。
あとは、沙羅を起こさないように部屋に運んで寝かせるだけだ。
終始デートらしくはなかったけど、それでも沙羅が喜んでくれて

いたのならいいか。
妹を喜ばせる。それも兄の務めなのだろう。

1―7　どっちがいいのよ、と・・・

二人の言う通り、デートしてご機嫌を取っても最終的に僕が正座をさせられるという
現実は変わらないらしい。
「さぁお兄様。デートも無事終わりましたし、そろそろ答えを聞かせてもらっていいですか？」
「そ、それは……」
僕がヘタレとか、美味しく二人をいただきたいとかじゃなくて、物理的に選ぶことが出来ないんだ。
倉科さんを選べば、沙羅による折檻を受け、沙羅を選べば倉科さんに呪われてしまう。
そんな、どっちに転んでも死に近いモノがあるのに選ぶなんて出来るはずがない。
「輝くんなら私を選んでくれるよね？　だって輝くん、デートの時にあんなに私にエッチなことをしたんだもん。そこまでしておいて選ばないのは無いよね？」
「ちょ――っ」
「な――っ！？」
く、倉科さん！？　あ、あなたは何、特大の爆弾を落としているのですか！　そんな
爆弾を落とされたら沙羅が――
「お、お兄様……？　今、凄く不愉快な言葉を聞いたのですが、わたしの聞き間違いでしょうか？」
沙羅が鬼のような形相を浮かべている。こ、これは……殺されるかもしれない。
「あ、あのね……沙羅。今のは倉科さんの妄言でね……」
「輝くん嘘を吐くのはよくないわよ。輝くんは、私の太ももをネッ

トリとイヤらしく触
っていたわよね？」
「そ、そうですね……」
無意識で――とても重要だからもう一度言うけど、無意識で触っていたんだよね。
何か不思議な魔力が倉科さんの太ももから出ていたんだと思う。
「へぇ……お兄様、渚さんにそんなことをしていたのですか。わたしには、そんなこと
をしてくれなかったというのに……」
「すいません。本当にすいません」
ただひたすら謝る。下手な言い訳はするだけ無駄だ。こういう時はとにかく謝るしかない。
「輝くんにエッチな悪戯をされた時点で私の勝ちじゃない？」
ふふん、と胸を張る倉科さん。それを見た沙羅も同じように胸を張り――
「わ、わたしはお兄様にキスをされましたよ！　これはもう完全勝利ですよね！」
倉科さんの言葉に対抗してくる。キスと言っても頬になんだけどね。わざと場所を言
わないのは、さすがだと思うよ。
「き、きき、キス！？　そ、それはさすがに嘘だよね！？」
「嘘じゃないですよ。わたしはお兄様に優しく、そして時には激しくキスをされました！」
身体をクネクネと動かしながら、僕にキスをされた思い出を語る沙羅。
だけど、一つだけ言わせて欲しい。確かに沙羅の言うようにキスはしたけど、僕がキ
スをした場所は頬であって、他の場所にはしていない。それに激しくキスをした覚えは
ない。ほんとに軽く触れるだけのキスだったんだけど……

「あの時のキスで、わたしの身体はもう蕩けてしまいました♪」
頬を赤く染め、照れている沙羅。僕の記憶ではキスをした瞬間に、意識を失っていたような気がしたんだけど……
「渚さんはキスとかされなかったのですか？」
倉科さんから見たらムカつくような顔――そんな顔を浮かべながら、沙羅が挑発をする。
「デートでキスもされないようでは……とうていお兄様に選ばれるわけがありませんよね？」
「そ、そんなことないもん！　キスだけが全てじゃないもん！」
「ですが、キスというのはとても大事ではないですか？」
「ぐぬぬ……」
沙羅の言葉に倉科さんが苦痛の表情を浮かべる。
「渚さん。今回はあなたの負けですよ」
完全な勝利宣言。自身の勝利を確実に意識した言葉。それを倉科さんに浴びせる。
「これでお兄様は、わたしのモノですね♪」
『わたしのモノ』って、僕は物じゃないんだけど。せめて人扱いをして欲しい。
「……もん」
「何ですか？　負けた言い訳でも言うのですか？」
「……私だって、輝くんに凄いことされたもん」
「凄いことってキスには勝てないんですよね？」
倉科さんに多少のセクハラ行為をしていまったけど、キスのインパクトには勝てないかもしれない。まぁ僕からすれば、どっちも同じぐらいのインパクトがあるけどね。
「わ、私は輝くんに女の子の大事な所を触られたんだよ！　沙羅ちゃんは輝くんに触られたこと、あるのかな？」

「んな――っ！？」
「女の子の大事な大事な所だよ？　妹の沙羅ちゃんには、無縁な行為かもね？」
　先ほどの仕返しと言わんばかりに倉科さんが攻める。しかし、僕の記憶では女の子の
大事な所を触った覚えはないんだよね。太ももを触っただけなんですけど。
　まぁ、太ももも女の子の大事な部分ではあるけどね。
「沙羅ちゃんには悪いけど、あのままいってたら、子供が出来てたかもしれないわね」
「こ、子供ですって！？」
「そうだよ。今回は偶然出来なかっただけで、実際は子供が出来ててもおかしくないのよ」
　倉科さんは何を言っているのだろうか？　子供が出来るような行為。そんな行為をし
てはいないのに、如何にもそういう行為をしてましたみたいなことを言う。
　僕がしたのは膝枕でのセクハラ行為までなのに――どうして、そんな嘘を吐くのか。
「お、おお、お兄様が穢されたなんて、そんな……」
　そして、沙羅もそんな嘘を信じないで欲しい。
「お兄様の初めては、わたしが奪う予定でしたのに……」
　あわわ、と泣き崩れる沙羅。
　少し待って欲しい。沙羅が僕の初めてを奪う予定って初めて聞いたよ。
　沙羅が僕の貞操を狙っていたとは……
「ふ、ふふ……残念だったね沙羅ちゃん。輝くんの初めては私が奪っちゃったのです」
　奪ったって、だから僕の初めてはまだ奪われてないからね。
　沙羅もそうだけど、倉科さんも嘘を吐きすぎだろ。何でそこまで

デートの内容で張り
合おうとしているのか。どっちも楽しいデートだった。では、ダメなのかな？
「お兄様の……お兄様のが……」
よほど倉科さんの言葉がショックだったのか、本気で落ち込んでいるよ。
「あ、あのね沙羅――」
「お兄様の童貞は失われましたが、まだわたしのが残っています！
お兄様、わたしの
初めてはお兄様に捧げますからね！」
「や、あの……」
兄妹でそれはさすがに拙いでしょ。いや、元々僕にそんなことをする勇気はないけど、
それでも兄妹でそれはダメだ。
「沙羅ちゃん、私のことは義姉さんと呼んでもいいんだよ？」
今度は、倉科さんが勝ち誇ったような笑みを浮かべる。そして沙羅は悔しそうな顔を
浮かべている。さっきと表情が逆転しているよ。
「私と輝くんが結婚するのも時間の問題かもね」
それはないと思いますよ。偶に忘れてしまうけど、倉科さんは幽霊で僕は生きている
人間なんだよ。それで結婚というのは少し……
「結婚なんて認めないんだから。お兄様と結婚するのはわたしなんです！」
沙羅は沙羅で何を言っているんだ。人間と幽霊でも、どうかと思うのに兄と妹で結婚
というのは更にどうかと思う。
「輝くんは私のモノなのに、譲る気はないの？」
「譲るつもりなんてないですよ。お兄様は生涯、わたしだけを見ていればいいんです」

「ダメなの！　輝くんは私だけを見るの！」
ぐいっと倉科さんが僕の腕を掴む。
「ダメです！　わたしだけを見るんです！」
沙羅も負けじと僕の腕を掴む。
「ちょっ、二人とも痛い……」
「輝くんはムチムチな身体が好きなのよ」
「うぐ……っ」
掴んだ腕を自信の胸に当てる。ふにっと柔らかな感触が僕の腕に……っ！
「お兄様はそんな胸とかに騙される人ではありません！」
そう言いながら沙羅も、僕の腕を自身の胸に当ててくる。倉科さんほどの弾力がある
わけじゃないけど、沙羅もそれなりに柔らかな感触を感じる。
「にひひ……っ、沙羅ちゃん現実を見た方がいいんじゃないかな？」
「わたしはいつでも現実を見ています！」
「だったら、輝くんがムチムチな身体が好きっていうのを認めた方がいいんじゃないかな？」
「ですから、お兄様は色香に騙される人ではありませんって」
「そうかな？　でも輝くんのソコは……」
倉科さんがチラリと僕のある部分を見やる。
「ちょっ、何処を見ているんですか！？」
隠そうにも二人に腕を掴まれているので、隠すことが出来ない。
「ほら、ある部分が随分と元気な感じに」
「止めて！　わざわざ声に出さないで！」
間違ってないけど、あえて声に出さないで欲しい。ある部分が妙に元気になっている
けど、それを報告しなくてもいいじゃないか。
「ほぅら、こんな風に元気になってるんだよ？」
「はうわっ！？」
ツンツンと僕のある部分を指で突く。

「お兄様！　な、なんてことをしているんですか！？」
「そんなこと言われても……」
これは一種の生理現象だし、抑えることなんてなかなか出来るわけではない。それに
これは、二人が胸を押しつけてくるのが悪いんじゃないか。
そんなことをされなかったら、一部分が元気になることなんてなかったのに。
「お兄様。他の女に興奮するなんて許しませんよ」
沙羅が強めに胸を腕に押しつけてくる。
「さ、沙羅！？」
「あー、ダメだよ。輝くんは私の身体だけに興奮していればいいのよ」
倉科さんも負けじと強めに胸を押しつけてくる。
だ、だから二人とも胸を押しつけるのは止めてって。そんなに、ふにふにと胸を押し
つけられると僕のある部分が更に――
何でこんなことになっているのだろうか？　初めはデートの総括として沙羅に正座を
させられていたのに、気が付くと二人に胸を押しつけられている。
ある意味では幸せな気分かもしれないけど、最終的な展開を考えると不幸な気分になる。
どうせ沙羅に正座を強要させられて、教育という名の暴力を受けるのだから。
そして、その後に倉科さんに慰められる。
まさしく飴と鞭を使い分けている感じだよ。
「わたしの身体の方がいいんです！」
「私の身体だよ」
それでも――今回のデートで、どっちがよかったのか答えを出さなくて済んでいる

からこれはこれでいいの、かな？

とりあえず、どっちの身体がいいのかというのは……どっちも素敵だとしか言いようがないね。

1―8　自転車でのロマン

「はぁ……何で僕がこんなことをしないといけないんでしょうね？」
「むむっ、彼女のお願いを叶えるのが、そんなにも不服なのかしら」
「……そもそも倉科さんは僕の彼女じゃないでしょ」
一方的に告白をされて、付き合いとか言われてもすぐに『はい』とは言えない。
まぁ、色々と妥協して今の関係になっているけど、とりあず彼女ではないね。
「細かいことを気にしすぎ。私が輝くんの彼女かどうかなんて些細なことでしょ？」
「あなたが、振った話題なんですけどね……」
自分から彼女と言っておきながら、関係ないとはこれ如何に？
「もう……我儘ばっかり言ってないで、キビキビと自転車を漕ぐの」
「……分かりましたよ」
反論をするのを諦めて、大人しく自転車を漕ぐ。ただ普通に自転車を漕ぐのなら問題はないのだけど、今の状態は普通ではない。
後ろに倉科さんが座っている――所謂、二人乗りというやつだ。
幽霊である倉科さんが後に乗っていても関係がないと思うかもしれないが、倉科さんにも普通に体重はあるわけで、この自転車には僕と倉科さん。二人の重さが加わっている。
そして、その二人分の重さを感じながら僕は自転車を漕いでいるわけなんだ。
「はぁ……はぁ……やっぱり、二人乗りは大変ですよ」
しかも、特に目的もなく自転車を漕いでいるから、終わりが全然見えない。
いつ終わるかが分かれば、多少は気が楽になるんだけどね。

「男の子でしょ？　我慢しなさい」
「……せめて、何処に向かっているのかだけでも教えてくれませんか？」
そうすれば僕もあと少しくらい頑張れると思うんですよ。
「何処にって言われても、特に考えてないのよね」
「え……？」
「私はただ、輝くんと自転車の二人乗りをしたかっただけなのよね」
まさかの発言。目的もなく自転車を漕がされていたとは……
「目的地はないけど、この二人乗りには意味があるんだよ？」
後ろにいるから表情を読み取ることは出来ないけど、きっと倉科さんのことだからドヤ
顔をしているんだろうね。
「……どんな意味があるんですか？」
「それは勿論――男の子と二人乗りで自転車に乗るのって、なんだかロマンじゃない？」
「ロマン……ですか？」
「そうよ。女の子にとっては、憧れのシチュエーションなのよ。夕暮れの中、好きな男
の子と自転車に二人乗りをする。ゆっくりと、だけど決して遅いスピードじゃない自転車。
その自転車から振り落とされないように後ろから、服をきゅっと掴むの。それって、
何だか素敵じゃない？」
「素敵かどうかは知りませんけど、今は夕方ではないですよ」
倉科さんの言った言葉は、確かによくあるシチュエーションかもしれない。だからと
いって、それが素敵かと問われれば微妙な気がする。
「確かに夕方じゃないけど、輝くんと二人乗りをしてることに意味があるの！」
後ろから、がぁーと吠える倉科さん。表情は見えなくても、怒っ

ているのは分かる。
「輝くんって、ほんと女心が分かってないわね」
「まぁ、男ですからね」
「屁理屈、禁止」
後ろから頭を叩かれてしまった。軽く小突くような感じだったが、出来ることなら
運転中には止めて欲しい。他の人から見れば一人で乗っているようにしか見えないだろ
うけど、実際は二人乗りでバランスと取るのが難しい。
だから転ばないためにも、あまり危ないことはして欲しくない。
……結局は、僕の自業自得なんだろうけどね。
「倉科さん。そろそろ家に戻ってもいいですか？」
「まだダメよ。もう少し、この素敵な時間を堪能させて」
「……でしたら、せめて目的地を決めて下さい」
このままでは、何回も同じ所をグルグルと回ることになってしまう。
「一応、憧れのシチュエーションなんですよね？　なら、憧れの場所とかあるんじゃないんですか？」
夕暮れの中、自転車を二人乗りするとか言っているくらいだから、その中に当然理想
の場所とかあるはずだ。あるのなら、そこを目指して自転車を漕いだ方が僕の精神衛生上
楽になれる。
「憧れの場所？　一応、あるにはあるけど……」
何故か、言いにくそうにしている。
「あるのなら、言って下さい。そこを目指しますから」
「本当に言っていいの？」
「いいですよ。目的地があった方が僕自身が楽になれるので」
ですから遠慮なく言ってくださいよ。遠慮するなんて、あなたらしくないですよ。

「……後悔しない？」
「しませんってば。遠慮なく言ってください」
「分かったわ。あのね――」

倉科さんから発せられた理想の場所。その場所は――
「え……？　あそこですか？」
「うん。あそこの原っぱに行きたいの」
倉科さんが言っている原っぱ。別に原っぱ自体は問題ないのだけど、一番の問題は距離だ。
自転車を使っても一時間くらいかかるのだ。二人乗りの状態で一時間の運転はかなり骨が折れそうだ。
「やっぱり、キツイよね？　違う所でもいいんだけど」
「いえ、その原っぱに行きますよ」
わざわざ聞いておいて、行かないのは嫌だ。それに倉科さんが行きたいと言っているのなら行こうじゃないか。
「多少、飛ばしますからきちんと掴まってて下さいね」
「え、あ、ちょ――っ！？」
返事を待たずに勢いよく自転車を漕ぐ。かなり距離はあるが、リクエストされた以上応えるのが男の子なんでしょ？　ねぇ、倉科さん。
「は、早い。輝くん、ちょっと早いわよ」
「はぁ、はぁ……スピードを出してますから、そりゃ速いでしょうね」
とは言っても、もの凄くスピードを出しているわけではない。二人乗りという状態を考えると速いだけで、ビックリする程速いわけじゃないのだ。
それでも運動不足ぎみの僕からすれば、かなりの重労働ではあるんだけどね。
「倉科さん。きちんと掴まって下さいね」

「う、うん……」
倉科さんが、ぎゅっと服の裾を掴む。遠慮ぎみにだけどシッカリと裾を掴む様は、
とても可愛らしいと思う。
そんなことを思いながら自転車を漕ぐ。倉科さんが行きたがっている原っぱを目指して。

「ぜぇ、はぁ……やっと着いた」
「あははー、かなりお疲れだね」
「そう、ですね……かなり疲れましたよ」
この距離を二人乗りで移動するのは、かなり厳しかった。
「好きな人と原っぱ……」
倉科さんが感慨深そうに原っぱを見つめている。
「なかなかに素敵な原っぱでしょ」
「……そうですね。まぁ、素敵な原っぱですね」
特に何かがあるわけじゃなく、本当に何もない原っぱ。だけどその原っぱも一人じゃ
なくて誰かと一緒なら――
「男の子と……好きな人とこの原っぱに来るのが夢だったの」
「夢だったんですか」
「うん。別に何かをしたいわけじゃなくて、ただ二人でこの光景を見たい。
この光景を見て、同じ感覚を抱いてもらう。そんなのに憧れてるの」
僅かに頬を赤く染め、照れくさそうに答える。
「倉科さんの夢を叶えることが出来てよかったですよ」
ここまでキツイ思いをした甲斐があるってものだ。
「ねぇ輝くん……」
「何ですか？」
「む～わざわざ言わないと分からないのかな？」

ふくれっ面になる倉科さん。わざわざ言ってくれないと分かりませんよ。
「憧れのシチュエーションで、理想の場所に居るんだよ？　それですることとっていったら、一つしかないじゃない」
「それが分からないんですけど」
「……少しは自分で考えて欲しいんだけどね」
「なんかすいません」
女心をまったく理解してなくてごめんなさい。
「私だからいいものの、沙羅ちゃんが相手だったら大変だよ？」
「……そうかもしれませんね」
沙羅が相手だったら、確実に暴力を受けていただろう。お仕置きという名の暴力を。
そういう意味では倉科さんが相手でよかった、のかな？
「沙羅ちゃんほどじゃないけど、あまり焦らされると私も怒っちゃうよ？」
「はは、は……」
それは勘弁してください。倉科さんにまで暴力を振るわれたら、僕の休まる時が無くなってしまうじゃないか。
「怒られたくないのなら私のして欲しいこと、して欲しいな」
「だから、それが分からな――んむっ！？」
「ん、んちゅ……ぁ」
「な、なな、何を……！？」
いや、何をされたかなんて理解している。倉科さんにキスをされたんだ。
頬や額にではなく、唇に……
「輝くんがしてくれないから、私からしちゃった♪」
ぺろっと舌を出して、お茶目な笑みを浮かべる。
「それに、沙羅ちゃんだけキスをしたなんてズルいもんね。だから

私もキス、したかったの」
「したかったって……」
それだけの理由でいきなりキスをするのは。
「輝くんは私にキスされるの嫌だった？」
「……その聞き方はズルいですよ」
そんな風に聞かれたら嫌だなんて言えるわけがない。
「こんなシチュエーションでのキス……やっぱり素敵だね」
「……」
「むぅ……黙ってないで感想を言ってよ」
「よかったんじゃないですか？」
倉科さんの柔らかい唇の感触は気持ちよかったけど、それを報告するつもりはない。
なんだか負けた気分になるしね。
「まったく、素直じゃないんだから」
「……帰りましょうか」
「あぁん、怒らないでよ！」
「怒ってませんよ」
「本当に？」
「本当ですよ」
ただ照れているだけですから。ええ、本当に照れているだけですから。
「女の子を焦らせるなんて、輝くんは鬼畜だね」
「その言い方は止めて欲しいです」
変な誤解を生んでしまうじゃないですか。僕は普通の男なんですからね。
「あはは、ごめんね？　でも輝くんが鬼畜なのは事実なんだよ？」
「何処がですか？」
「だって、女の子がこんなにも君を求めているのに、全然応えてくれないんだもん。
そんなんだったら、鬼畜だって言われても仕方ないよね？」

「他の言い方があると思いますよ」
不本意だけど、鈍感とか朴念仁とかあると思う。
「そうかもしれないけど、鬼畜の方が似合うかな？」
「全然嬉しくないですからね」
そんな言葉で喜ぶ人はただの変態だろう。
「さて、そろそろお家に帰ろうか」
「ちょ――っ、人の言葉を無視しないで下さいよ！」
「早く帰って沙羅ちゃんのご飯を食べましょう♪」
「く、倉科さん！？」
もうすでに自転車に乗りこんでいる倉科さん。どうやら僕の言葉は聞いてもらえないようだ。
それにしても、今から家に帰るのか……面倒だな。
また一時間ほどかけて自転車を漕がないといけないのか。
はぁ……帰ったら、速攻で寝そうだよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8105y/

僕と幽霊と・・・

2011年12月21日23時56分発行